

公衆衛生看護学専攻科を認可

文部科学省 来年度開設 九州内の大学初

本学が文部科学省に申請していた公衆衛生看護学専攻科の開設が8月30日付で許可されました。来年4月に開設されます。保健師養成を目的とした専攻科の設置は、九州エリアの大学では初めてです。

新専攻科は、看護師免許の取得者（見込み者含む）で、大学を卒業（あるいは卒業見込み）した人が対象。修学年限は1年で、定員は20人。保健師としての高度な専門知識と実践力を持って地域の健康増進に寄与するとともに、将来、リーダーシップを発揮できる人材の養成を目指します。

保健師養成に関して本学はこれまで、学部教育（看護学科）の中で看護師教育課程と並行する形で保健師基礎教育を行ってきました（保健師養成選択制）。しかし、急激な少子高齢化の進展や医療制度構造改革による生活習慣病対策の重視、地域包括ケアの推進といった時代の変化の中で、看護師、保健師共

により高度な知識や技能が要求されるようになっていきます。これに伴い、各々の養成課程の総単位数も増加し、従来の看護師教育と保健師教育の並立では、カリキュラム全体の柔軟性を奪いかねない状況が懸念されていました。今回の新専攻科開設により、看護学科の保健師養成選択制は本年度で終了します。

新専攻科の認可を受け、竹屋元裕学長は「これまでの準備が報われたという思い。新体制での保健師教育が順調に発展していくとともに、志の高い人たちが集まってくることを期待しています」と話しています。

（NL編集部）

残り半年 気を引き締め直して

修論中間発表会 昨年度開設の看護領域は初の登壇

大学院の修士学位論文中間発表会が6日（金）、1304M講義室であり、16人の大学院生が、緊張した面持ちで研究の進捗状況などを発表しました。登壇したのは臨床検査領域5人、リハビリテーション領域8人、看護領域の3人。昨年度開設された看護領域の院生にとっては、初めての登壇となりました。

1人20分（発表15分、質疑応答5分）の持ち時間で、「健常成人における箸の使用を意図した時に生じる視線の特徴と箸操作能力の関係性について」「新興感染症COVID-19流行下における看護管理者の危機管理の実態」「農村地域に在住するシニア女性の化粧習慣と身体・認知・心理的機能との関連性」など、各自が研究の背景や研究計画、手法、現在の進捗状況を紹介しました。発表に続く質疑応答では、教員側から細部にわたる質問だけでなく、研究への助言も数多く飛び出し、会場は終始熱気にあふれていました。

発表を終えたリハビリテーション領域の次山航平さんは「今日の発表が終わったら、ぱーっとやるつもりでしたが、発表を終えた今、それどころではないという焦りを感じています。週単位でス

ケジュールを組みながら、残り約半年の大学院生活を乗り切りたいと思います」と気を引き締めていました。発表を見守った川口辰哉研究科長は、「今回は初となる看護領域を含めての発表会でしたが、全員が無事に発表を終えた姿を目にすることができ、とても嬉しく思います」と満足そうに話していました。（NL編集部）



16人の大学院生が、次々と研究内容を披露した修士学位論文中間発表会の会場

文部科学省がプログラム認定

本学の「熊保大 保健医療データサイエンティスト育成プログラム（リテラシーレベル、応用基礎レベル）」が8月27日付で、数理・データサイエンス・AI教育プログラム認定制度によるプログラムとして文部科学大臣から認定されました。9月1日現在、熊本県下では、本学のほか熊本大学、崇城大学、九州ルーテル学院大学、熊本高等専門学校が認定を受けています。このうちリテラシーレベルと応用基礎レベルの両方で認定を受けているのは熊本大学、崇城大学と本学のみです。

リテラシーレベルでは、1年次の授業科目（データサイエンス入門、統計学入門）を通してデータ駆動型社会と呼ばれる現代の状況や、統計学の内容を含むデータサイエンス・AIに関する初

歩的な事項、関連するリスク・セキュリティ・倫理の問題について学修します。また、応用基礎レベルでは、リテラシーレベルの内容に加え、2年次の授業科目を通して、AIについてさらに学び（情報処理技術）、総合的な演習を通してデータサイエンスを実践します（スキルアップセミナー）。

教育プログラムと並行して、数理・データサイエンス・AIに関連した教職員対象の企画も昨年度に引き続き進めたいと思っています。より一層のご支援・ご助力を賜りますようお願い申し上げます。

（数理・データサイエンス・AI教育専門部会 水本豪）

4年次生103人 研究の成果披露

医学検査学科 卒業研究発表会

医学検査学科の卒業研究発表会が4日（水）、50周年記念館で開かれ、4年次生103人が20グループに分かれ、研究の成果を発表しました。

発表は1グループあたり10分（うち質疑応答3分）で行われ、「分注精度の高いピペット操作と測定結果に及ぼす影響についての検討」や「ヒト肺小細胞癌を用いた3次元培養の基礎的検討」、「臨床検査技師国家試験における臨床化学分野の出題傾向の分析」など、多岐にわたる研究内容が披露されました。後輩や大学院生が見守る中、学生たちは臆することなく発表に立ち、会場からの質問にも真摯に答えていました。

聴講していた2年次生の徳山夕夏さんは「発表態度やスライドの作りが洗練されていて、とても感動しました。研究活動に対する具体的なイメージが持てたので、今後の研究室選びの参考にしていきたいです」。発表を終えた4年次生の田

上拓実さんは「ご指導くださった先生や大学院の先輩方、そして、ともに研究に明け暮れた研究室メンバーに感謝の気持ちを伝えたいです。今後も、進路達成に向けて精進していきます」と話していました。（NL編集部）



スーツに身を包み、緊張の面持ちで質問に答える学生たち

銀杏アラカルト

有田ポーセリングパークで記念撮影する参加者たち



■5年ぶり職員旅行でリフレッシュ 職員旅行が5日（木）～6日（金）にありました。コロナ禍で中断しており、今回は5年ぶりの開催。佐賀・有田方面の旅に53人が参加しました。参加者は宿泊組と日帰組の2コースに分かれ、有田ポーセリングパークや佐賀城本丸など、各観光地を散策。普段は話す機会が少ない方々と交流する場にもなり、心身のリフレッシュを図りながら、親睦を深めていました。（入試・広報課）

基盤研究 (C)
2022-24年

看護学科

久松美佐子准教授



地域特性に合わせた支援の在り方模索

私は、精神科に入院された離島出身の患者さんが、生まれ育った離島に帰りその人らしく生活するための退院支援についての研究をしています。

世界中のほとんどの国では、精神科入院患者の入院期間が50日以内なのにに対し、日本では250日を超えています。また、精神科から退院した患者さんの約4割が1年以内に再入院している現状があります。

そのため、精神科での退院支援では、長期入院や再入院が問題視されており、地域に馴染んでその人らしく生活するための支援が重要となります。特に、精神科病院所在地から離れた離島への退院支援は、その地域に密着して連携することは難しく、離島の地域特性に合わせた支援の方策が課題だと考えます。

今回、離島へ退院する患者さんへの看護師の退院支援の実際や、退院後の離島での患者さんの生活の実態について調査してきました。その中で、医療・社会資源が限られている離島でも暮らしていける生活力を高める支援や、離島ならではの地域支援の強みが明らかになってきました。

日本には400以上の有人離島が存在し、過疎地域も増加しています。今後は、離島やへき地における精神障害に対応した地域包括ケアの発展に貢献できたらと考えています。

1年次生「アカデミックスキルⅡ」

アカデミックスキル
支援センター

レポート

学生指導員が授業内容を検討

夏期研修会 憲法テーマに元高裁判事と討論

アカデミックスキル支援センターの運営や学修支援に携わる学生指導員の夏期研修会が2日(月)～4日(水)の3日間、同センターで行われました。学生指導員は「アカデミックスキル」科目の教材用動画や、アイデアあふれる授業資料を作成するなど「学生の、学生による、学生のための授業づくり」を目指し、毎年幅広い活動をしています。

今回の研修会は、後期開講の「アカデミックスキルⅡ」の講義内容を検討するのが狙い。「より効果的な授業を展開していくために、どのような教材や問いかけが必要か」というトピックについて議論を行いました。本年度の同授業では、憲法を題材とした文章作成やプレゼンテーションを通じ、論理的思考力の獲得をめざします。このため、研修会にはゲストスピーカーとして元東京高等裁判所判事の河村潤治さんが参加し、学生たちと熱心に議論を交わしました。

学生指導員たちは、17日(火)～19日(木)に開催されるリーダー学生夏季研修会で、後輩たちのサポートを行う予定です。(アカデミックスキル支援

センター 松尾健志郎)



憲法をテーマに活発な議論をする河村さん(左端)と学生指導員たち

インフォメーション

週間行事予定(9月18日～9月24日)	
9/18(水)	学校法人銀杏学園理事会・評議員会
9/20(金)	こころとからだの健康づくり研修会
9/24(火)	9月卒業式